April 20, 2023. No. 84

NEWS LETTER

The Hemingway Society of Japan

# 会長挨拶

小笠原亜衣

## それでも文学は終わらない

いきなり嫌なことを、と思われるかもしれないが、文学研究を志す若い人が減っているのは周知のことだろう。みなさんの多くが肌感覚でそう感じる身近な場所のひとつは、本協会を含む各種関連学会かもしれない。大学院生がいない。いや、いることはいるが、減っている。

どれぐらいの人が大学院で文学を専攻しているのか。中教審メンバーとして文科省の政策にも関わる本協会事務局長の大森さんに教えていただいたところ、最新のデータが令和 3 年度（2021）のもので、この年の全国国公立大および私大の修士課程の学生数約 16 万 2500 人、そのうち「人文科学のなかの文学関係」を専攻とするのが 1567 人。博士課程の学生数は計約 7 万 5 千人で、「文学関係」は 882 人。そのさらに 10 年前の 2011 年度の数字は、修士課程約 17 万 6 千人のうち文学専攻 2741 人、博士課程約 7 万 5 千人のうち文学専攻 1297 人。確かにかなり減っている。

データだけを見るならば、例えば社会科学も年々専攻学生を減らしている。が、加えてわれわれにとって痛いのは文学離れ、と言われる趨勢だ。本が売れない。文学批評は売れない。文学も売れない。若者は文学に興味がない。若者は本を読まない――

しかし、ふと思う。それって本当だろうか？

大型の本屋に行けば、若者で溢れている。熱気すら感じる。自分に何かを与えてくれる本はないか、言葉はないか、知識はないかと、本の森をさまよい歩いているように見える。観察していると、彼らが選ぶ本に人文学系の本も少なくないように見えるのだ。

「文学離れ」の通説も私は疑っている。最近小笠原さんは K-pop のことしか考えてないでしょ、と同僚である大会運営委員長の塚田さんにこの前も言われ、いやいやヘミングウェイのことも考えてますよ、と言ったものの、よく考えると確かにここ 2 年、私は彼に K-pop のことばかり話しているかもしれない。世界を席巻する韓国発の K-culture、その中核を担う K-pop と呼ばれる音楽。日本の多くの若者も支持する K-pop がそんなにも気になるのは、芸術的なパフォーマンスもさることながら、彼ら／彼女らが紡ぐ言葉がどうみても文学だからだ。もちろん K-pop のすべてがそうとは言わないが、経済的格差や苛烈な競争社会など韓国の若者がさらされる苦境への疑問や抵抗、あるいはフェミニズムに通ずる女性をめぐる歌詞が目を引く。短編小説と呼べるような作品すらあ

る。たとえば現在世界的活躍が著しいグループ BTS のメンバーが崇拝する Epik High が 2023 年 2 月に出したアルバム中の一曲 “God’s Latte”。ソウルのカフェで一緒にいる「神」はストロベリー・ラテを頼み、語り手はブラックコーヒーを頼む、という場面設定の後に以下の一節が続く（英語訳はグループの公式 YouTube より）。

He smiled and said
“What do you want to know? Ask me anything.
I’m busy but I have a few minutes free.”
Hmm I have the Internet, wikipedia
And can find any answer myself
Oh right, “What kind of people end up in hell?”
I asked and then took a sip
He couldn’t answer for a while, then said,
“Time’s up”
I burned my tongue.

この歌詞を初めて目にしたとき、ヘミングウェイの短編「神のしぐさ」(“A Divine Gesture”)（1922）とあまりにも重なり驚いた。同時代の機械文明への揶揄。「忙しい」と言い、気まぐれで頼りにならない神。甘い理想より苦く残酷な真実と向き合うことを選んだ戦後世代のヘミングウェイだったが、「神のしぐさ」から 100 年後、本歌の語り手もブラックコーヒーを注文し、“I don’t like my truth sweetened / I like it bitter” と言う。甘い夢のようなラテを飲む神との対比だろうが、ハードボイルドを気取るこの語り手自身もインターネットですべて事足りると考える現代人の戯画である。（歌の後半では「神」の正体も明かされる。興味のある方は Youtube の英語訳をご覧ください）

この歌詞を書いた Epik High のメンバー TABLO 氏は、若い頃にヘミングウェイを好んで読んだという（！）。彼はすでに 40 代で若者とは言えない。しかし彼に心酔する BTS メンバー、さらに BTS に熱狂する世界中の若者に、言葉で世界を切り取る営みの神髄は引き継がれ共有されているように思う。そして、それは紛れもない文学だ。自分や世界について虚構の物語として差し出し、真実を描こうとすること。

今回はヘミングウェイにつながる K-pop を恣意的に取り上げたが、もちろん J-pop にもアメリカの若い世代の歌にも文学は宿っている。100 年前の小説を読まないから、大学で研究しないから、若者が文学を欲していないと断ずるのは尚早に思う。われわれが取り組むべきは、「文学」を求めているが自分でもそのことに気づいていないかもしれない若者たちをどうやって研究の世界へ招くか、あるいは欲を言えば、どうやってヘミングウェイへ導くか、という超・難題だろう（みなさま、アイデアをお待ちしております）。

# 2022 年度（令和 4 年）
# 日本ヘミングウェイ協会　総会報告
# (2022 年 12 月 17 日　第 33 回全国大会）

1．議事

（1）会計に関する件

① 2021 年度決算報告・会計監査報告

別紙資料（「会計報告」として本紙別頁に掲載）を基に 2021 年度の会計報告ならびに会計監査報告がなされ、異議なく承認された。

② 2022 年度会計経過報告・2023 年度予算案

別紙資料（「会計報告」として本紙別頁に掲載）を基に 2022 年度の予算案が提案され、異議なく承認された。

（2）会則・規程の変更に関する件

①会則変更：評議員と会長・事務局長の選任

従前の会則では､「会長を議長として評議員会を構成する」とされていた一方で、会長が必ず評議員に選出されるとは規定されておらず、運営上矛盾が生じる可能性があった。同じく、「事務局長は会長を補佐する」とありつつも、事務局長が評議員に含まれない可能性が残る規定となっていた。このことを解消するために、「会長は評議員を兼務」「事務局長は評議員を兼務」という規定を加える提案がなされた。これに伴い、細則 4 を評議員 5 名のうち会長及び事務局長を除く評議員 3 名を会員の選挙により選出するという内容に改める提案もなされた。

また、付帯事項として、会長、事務局長、並びに評議員の改選年度を同じにするために、2022 年度の評議員選で選出される評議員に限って特例で任期を 2 年とすることが提案された。そのほか、事務局本部の所在地の変更が提案された。

以上の提案について、異議なく承認された。なお、改定された会則は本協会公式 WEB に掲載されているので参照されたい。

（http://hemingwayjapan.org/about-our-society/regulations）

②『ヘミングウェイ研究』関連規程

■「『ヘミングウェイ研究』投稿規程」について、大幅な改定の提案がなされ、一部修正の意見が出され、その修正案を含み、承認された。主な改定内容は、下記の通りである。

- ✓（研究論文の種類）研究論文等は、特集論文と投稿論文からなるとし、このうち、特集論文は本協会主催のシンポジウムやワークショップにおける発表を論文にしたものであって審査を経ずに執筆者の責任において掲載されるものであり、招待論文あるいは慫慂論文に類するものとすること。投稿論文は、選考委員会による審査を経て、掲載可の判断がなされたものとすること。
- ✓（体裁）「MLA に準拠していないものは選考並びに掲載の対象としないことがある」と明記すること。
- ✓（提出方法）公式サイトの論文投稿フォームから、電子ファイルを添付して投稿とすること。
- ✓（締め切り）投稿論文の締め切りは、毎年 2 月末日とすること。
- ✓（特集論文の確認作業）特集論文は誤字脱字や形式等、並びに本協会の信頼を損なう表現等がないかの確認のみ行うこととし、確認作業は、本協会運営委員が分担して行うものとすること。

■「『ヘミングウェイ研究』の編集・選考に係る委員会規程」について、大幅な改定の提案がなされ、異議なく承認された。主な改定内容は、下記の通りである。

✓「学術誌『ヘミングウェイ研究』委員会規約」という名称を「『ヘミングウェイ研究』の編集・選考に係る委員会規程」に改めること。

✓編集委員会の業務を明確に規定したこと。

✓選考委員会は投稿論文の掲載の可否に係る審査を行うことを明確に規定したこと。

なお、改定された上記２つの規程は、本協会公式 WEB に掲載されているので参照されたい。（http://hemingwayjapan.org/about-our-society/regulations）

２．報告事項

（1）2023 年度全国大会・ワークショップの開催予定に関する件

「大会運営報告」として本紙別頁に掲載されている内容が、大会運営委員会より報告された。

（2）任期満了に伴う 2023 年度の各種委員の選任に関する件

会長より改選となる 2023 年度の各種委員の選任について、鋭意進行中であり、いずれ委嘱状をもってそれぞれの委員を委嘱する予定であることが報告された。なお、2023 年度からの委員等構成は本誌別頁に掲載の通りである。

以上

## 評議員選挙　結果報告

2023 年 4 月 15 日締切の郵送で行われた「日本ヘミングウェイ協会評議員」選挙の結果をお知らせします。

開票の結果、会則の細則 4 に則り、下記の会長小笠原亜衣、事務局長大森昭生に加え、選出された 3 名の合計 5 名が次期評議員に決定しました。

尚、次期評議員の任期は 2023 年 4 月 1 日～ 2025 年 3 月 31 日までです。

**小笠原亜衣、大森昭生、倉林秀男、高野泰志、フェアバンクス香織**

＜選挙概要＞

投票者数 37 名（有効投票者数　36 名　棄権 1 名）

全投票数　107 票　（※ 2 名のみ投票者が 1 名いたため）

得票数 10 票以上の 3 名が評議員に決定。次点は 8 票。

選挙にご協力いただきありがとうございました。

# 会計報告

## 日本ヘミングウェイ協会　2021年度＜2021年4月～2022年3月＞収支決算

| 収入 | | 備考 |
|---|---|---|
| 前年度繰越金 | 2,121,788 | |
| 会費 | 453,000 | |
| 『ヘミングウェイ研究』売上 | 0 | |
| 抜刷代 | 0 | 発刊を見送ったためなし |
| 銀行利子 | 0 | |
| 収入合計 | 2,574,788 | |

| 支出 | | 備考 |
|---|---|---|
| 大会運営費 | 0 | オンライン開催で不要 |
| ニューズレター諸経費 | 0 | オンラインのため不要 |
| 『ヘミングウェイ研究』諸経費 | 0 | 発刊を見送ったため不要 |
| 抜刷代 | 0 | 同上 |
| 諸経費 | 19,105 | |
| 奨学金・講師謝礼 | 0 | |
| その他（予備費） | 0 | |
| 支出合計 | 19,105 | |

| | |
|---|---|
| 次年度繰越金 | 2,555,683 |

次年度繰越金の内訳

| | |
|---|---|
| 郵便局 | 2,555,683 |
| 現金 | 0 |
| 合計 | 2,555,683 |

日本ヘミングウェイ協会
事務局長 新関　芳生
会計分室 大森　昭生
会計監査 古谷　裕美

## 日本ヘミングウェイ協会　2022年度収支＜2022年4月～2023年3月＞（執行状況）

| 収入 | | 備考 |
|---|---|---|
| 前年度繰越金 | 2,555,683 | |
| 会費 | 388,000 | |
| 『ヘミングウェイ研究』売上 | 6,000 | |
| 協会30周年（寄付） | 150,000 | |
| 収入合計 | 3,099,683 | |

| 支出 | | 備考 |
|---|---|---|
| 大会運営費 | 33,460 | |
| ニューズレター諸経費 | 0 | WEB化による削減 |
| 『ヘミングウェイ研究』諸経費 | 269,633 | |
| 諸経費 | 15,200 | |
| 奨学金・講師謝礼 | 0 | |
| 協会30周年事業（出版費助成） | 1,000,000 | 本年度のみ特別計上 |
| 振り込み手数料 | 495 | |
| 郵送費（会費請求） | 10,662 | 各種発送費等 |
| ゆうちょダイレクト トークン使用料 | 825 | |
| その他（予備費） | 0 | |
| 支出合計 | 1,330,275 | |

| | |
|---|---|
| 現在の残高(12/16現在) | 1,769,408 |

## 日本ヘミングウェイ協会　2023年度予算＜2023年4月～2024年3月＞（案）

| 収入 | | 備考 |
|---|---|---|
| 前年度繰越金 | 1,700,000 | |
| 会費 | 400,000 | 2022年度実績を基に計上 |
| 『ヘミングウェイ研究』売上 | 6,000 | 2022年度実績を基に計上 |
| 抜刷代 | 5,000 | |
| 銀行利子 | 5 | |
| 収入合計 | 2,111,005 | |
| 次年度繰越金（予定） | 1,681,005 | |

| 支出 | | 備考 |
|---|---|---|
| 大会運営費 | 45,000 | 2022年度実績を基に計上 |
| ニューズレター諸経費 | 10,000 | WEB化による削減 |
| 『ヘミングウェイ研究』諸経費 | 260,000 | 2022年度実績を基に計上 |
| 諸経費 | 55,000 | 各種発送費等 |
| 奨学金・講師謝礼 | 30,000 | |
| その他（予備費） | 30,000 | |
| 支出合計 | 430,000 | |

# 役員体制

## 協会役員・委員

| | |
|---|---|
| 任期 | 会長・事務局長：2022年4月～2025年３月（2022、2023、2024年度） |
| | 評議員：2023年4月～2025年3月(2023、2024年度) |
| | 各種委員：2023年4月～2026年3月(2023、2024，2025年度) |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 役員 | 会長 | 小笠原亜衣 | | | | |
| | 事務局長 | 大森昭生 | | | | |
| | 評議員 | 小笠原亜衣 | 大森昭生 | 倉林秀男 | 高野泰志 | フェアバンクス香織 |
| | 顧問 | 今村楯夫 | 島村法夫 | 前田一平 | （任期なし） | |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 事務局 | 事務局長 | 大森昭生 | |
| | 事務局長補佐 | 若松正晃 | |
| | 事務局員 | 田村恵理 | 久保公人 |
| | 会計 | 水口陽子 | |
| | 会計監査 | 古谷裕美 | |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 大会運営委員 | 委員長 | 塚田幸光 | | | | |
| | 委員 | 高野泰志 | 柳沢秀郎 | 陸　君 | フェアバンクス香織 | 古谷裕美 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 運営委員 | 岡本正明 | 河田英介 | 久保公人 | 倉林秀男 | 瀬名波栄潤 |
| | 中野学而 | 田村恵理 | 千葉義也 | 千代田夏夫 | 塚田幸光 |
| | 辻秀雄 | 戸田　慧 | 長尾晋宏 | 中村　亨 | 中村嘉雄 |
| | 長谷川裕一 | 平井智子 | フェアバンクス香織 | 古谷裕美 | 本荘忠大 |
| | 真鍋晶子 | 水口陽子 | 光冨省吾 | 村上　東 | 柳沢秀郎 |
| | 山本洋平 | 陸　君 | 若松正晃 | 渡邊俊 | |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 公式サイト運営室 | 室長 | 倉林秀男 | |
| | 委員 | 渡邊俊 | |

| | | | |
|---|---|---|---|
| ニューズレター編集委員会 | 委員長 | 長尾晋宏 | |
| | 委員 | 中村嘉雄 | 本荘忠大 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 資料室 | 資料室長 | 河田英介 | |
| | 委員 | 中野学而 | |

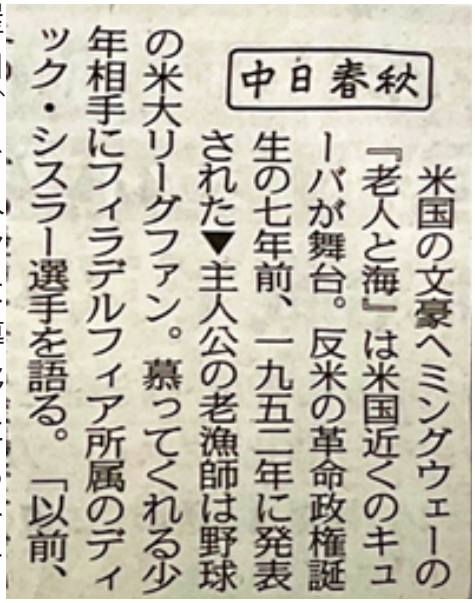
| | | | |
|---|---|---|---|
| 『ヘミングウェイ研究』編集委員会 | 委員長 | 倉林秀男 | |
| | 委員 | 柳沢秀郎 | |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 『ヘミングウェイ研究』選考委員 | 委員長 | 長谷川裕一 | | |
| | 委員 | 高野泰志 | 辻秀雄 | フェアバンクス香織 |

# Hemingway News

柳沢 秀郎

## 気になる表記「ヘミングウェー」


中日春秋

米国の文豪ヘミングウェーの『老人と海』は米国近くのキューバが舞台。反米の革命政権誕生の七年前、一九五二年に発表された▼主人公の老漁師は野球の米大リーグファン。慕ってくれる少年相手にフィラデルフィア所属のディック・シスラー選手を語る。「以前、

みなさんこんにちは、協会員の柳沢です。 私が名古屋で購読しております地方紙『中日新聞』には「中日春秋」というコラムがあります。このコラムニスト、ヘミングウェイが好きなのでしょう、しばしばヘミングウェイを引用しています。たとえば、2022 年 1 月 10 日の「成人の日」をテーマにしたコラムでは「フランシス・マカンバー」のウィルスンの言葉「いつまでも子どものままなのがいる。ときには一生、子どものままのもいる」を導入にしています。最近では 2023 年 3 月 31 日の「中日移籍予定のキューバ野球選手の亡命疑惑」をテーマにしたコラムで、『老人と海』のサンティアゴが少年に語る「もう一つの野球リーグ」(“the other league”) という言葉を引用し、革命前には本土のメジャーリーグがシーズンオフの冬季に暖かなキューバで例年行われていた「幻のリーグ」を複雑な米玖関係の象徴として導入に活かしています。

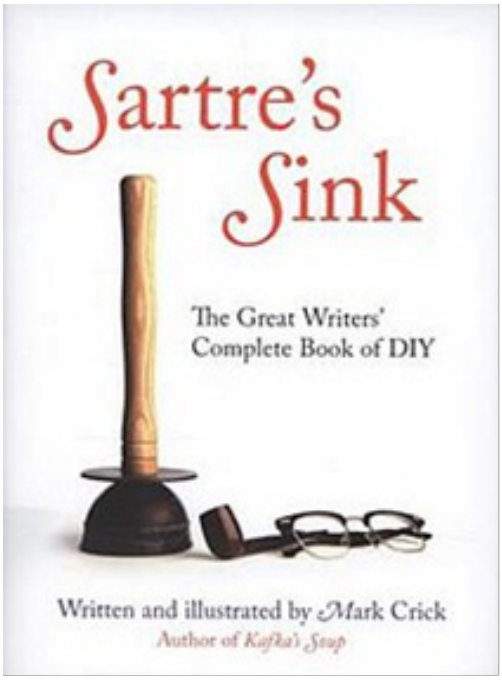
ヘミングウェイがコラムに登場すると、素直にうれしいのですが、ヘミングウェイの表記がいつも「ヘミングウェー」なのが残念でなりません。

# ヘミングウェイのいる光景（第14回）
## ―「キャラ化」する作家像とスタイルの「翻訳」

中垣恒太郎

### ヘミングウェイの文体を再創造する

「文学的腹話術師」の異名を持つマーク・クリック（Mark Crick）は世界の文豪の文体を模倣して作り上げた世界文学アンソロジーを三冊刊行している。『カフカのスープ』（*Kafka's Soup: A Complete History of World Literature In 17 Recipes,* 2005）は料理のレシピ本、『サルトルのシンク』（*Sartre's Sink: A Literary Manual for the DIY Enthusiasts*, 2008）



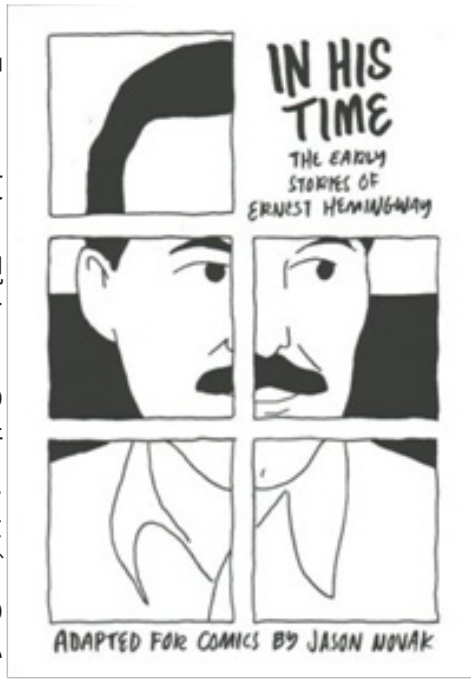

はDIY（家庭のインテリア）、『マキアヴェッリの芝生』（*Machiavelli's Lawn: The Great Writers' Garden Companion*, 2011）はガーデニングをそれぞれテーマに据えている。カフカ、プルースト、ヴァージニア・ウルフ、レイモンド・チャンドラー、スタインベック、ボルヘス、ガルシア＝マルケスが料理のレシピを披露し、サルトル、エミリー・ブロンテ、エドガー・アラン・ポー、ベケット、ゲーテ、コンラッド、村上春樹が家庭インテリアをめぐるDIYのヒントを解説し、シルヴィア・プラス、ブレヒト、イプセン、エミール・ゾラ、ブレット・イーストン・エリスらがガーデニングのコツを語る。文字通り、世界文学名作案内の奥行きを兼ね備えていながら、三冊それぞれのテーマが料理、インテリア、ガーデニングとごく身近な日常生活に根差しているところがおもしろい。この中でヘミングウェイが登場するのはDIYを主題に据えた『サルトルのシンク』の一編であり、『老人と海』の壮大なスケールの調子で、主人公である老人が壁紙の貼り替えに奮闘する。ちょうどAmazonでの「試し読み」にてヘミングウェイの章に触れることができる。作者マーク・クリック自身の本業は英国に拠点を置く写真家であるが、「文学的腹話術」によるこの世界文学アンソロジーは20近くの言語に翻訳されていて、世界文学の案内としても、料理・インテリア・ガーデニングのアイディア集としても気が利いた本として親しまれている。

残念ながら日本語での翻訳はないのだが、「パスティーシュ小説」と呼ばれる文体模写、言語遊戯を駆使したパロディ小説といえば、日本では自虐的名古屋論としての『蕎麦ときしめん』（1986）、英語教科書文体のパロディ『永遠のジャック＆ベティ』（1988）で知られる清水義範の存在があり、まさしく同じ試みとして『世界文学全集』『日本文学全集』（共に1992）もある。

その系譜は現在にも繋がっており、文豪それぞれの特有の言い回しをパロディにした試みは現在のSNS文化との相性も良いようで、神田桂一・菊地良『もし文豪たちがカップ焼きそばの作り方を書いたら』（宝島社、2017）は、Twitter発信によるネタの集積が書籍化されたものだ。書籍のタイトルがそのまま表しているようにカップ焼きそばの作り方が、合計100を超える文体で書き分けられている。

マーク・クリックや清水義範による一連の世界文学パスティーシュ・アンソロジーと重なる趣向であるが、Twitter 発信から誕生した企画だけにそれぞれが短い分量であること、パロディ色が強いことに特色がある。世界文学の作家のみならず、尾崎豊、小沢健二、星野源、尾崎世界観、川谷絵音、西野カナらミュージシャンをはじめ、ユーチューバー、芸人、タレントなどもラインナップされている。さらに加えて、パロディマンガ家、田中圭一によるイラストマンガも挟み込まれており、「もしも手塚治虫が太宰治を描いたら…を田中圭一が描いたら」など、スタイルの模倣はマンガ表現にまで及んでおり、松本零士、さくらももこ、藤子・F・不二雄、水木しげる、ちばてつやの筆致が描き分けられている。ヘミングウェイが登場するのは続編となる『もし文豪たちがカップ焼きそばの作り方を書いたら青のり MAX』（宝島社、2017）で、こちらもやはりモチーフは『老人と海』からとなっており、「老人と麺」として難儀な「湯切り」に挑んでいる。

パロディマンガ家としての田中圭一がさまざまなマンガ家の絵柄（スタイル）を自在に描き分けていることを参照するならば、メディアを越えて小説の文体を別のメディア表現にパスティーシュする試みも有益であろう。ジェイソン・ノヴァック（Jason Novak）『彼の時代――アーネスト・ヘミングウェイの初期作品集』（*In His Time: The Early Stories of Earnest Hemingway*, 2022）はグラフィック・ノベルによる翻案作品である。ヘミングウェイの小説の文体をコミックスの表現で再創造することを目指したとのことで、単行本の冒頭に付された「なぜヘミングウェイなのか？」という 3 頁ほどの序文にて、ヘミングウェイの文体は直接的でアクションの多いことからもスムーズにコミックスに「翻訳」できたと述べている。序論「なぜヘミングウェイなのか？」では現在、現役である表現者にとってヘミングウェイはさながら「恐竜」のように古びた古典的存在であるヘミングウェイをなぜ今さら扱うのかという問いからエッセイを展開しており、熱心なヘミングウェイのファンに対してはその非礼を詫びる姿勢を示しながらも、文章によるこの序文は視覚メディアの表現者がヘミングウェイからどのように自身の創作のインスピレーションを得たかを探る上で興味深い読み物になっている。




ノヴァックにとってのヘミングウェイの短編群はイメージの集積として映るようで、そこから視覚的な想像力を掻き立てられるようだ。佐々木マキによるマンガ「殺人者（ヘミングウェイによる）」（1967）や、タルコフスキーによる学生時代の習作映画「殺人者」（1956）などがもたらされていることからも、視覚メディアによる二次創作との相性の良さと共通するものであるのだろう。その中でもノヴァックはヘミングウェイの文体をコミックスで再創造する上で、武骨で粗く、飾り気のない筆致であること、さらにヘミングウェイの「氷山理論」をコマとコマの間の余白によって追求したことを強調している。ヘミングウェイ初期短編の翻案と銘打たれているが、ストーリーを再現するものではなく、イメージの集積である点に特色がある。

## アルコールと猫にまつわるヘミングウェイ・イメージの現在

デンマークのトマス・ヴィンターベア監督による映画『アナザーラウンド』（2020）は、主人公である高校教師が同僚と共に、あるノルウェー人哲学者による「血中アルコール濃度を常に 0.05% に保つと仕事の効率が良くなり想像力がみなぎる」という理論を実証するために常に酔った状態を保つ実験を行うことによってくりひろげられるヒューマン・コメディ作品で、第 93 回アカデミー賞（2021）国際長編映画賞を受賞するなど高い評価を得ている。物語冒頭で、「ヘミングウェイは毎日

夜 8 時まで酒を飲みながら執筆しつつも数々の名作を残した」という逸話が参照され、主人公たちは「目指せ、ヘミングウェイ」とばかりに始終酔っ払った状態を保つ実験に挑むことになる。

ヘミングウェイとアルコールの連想が神話化されている端的な例となるものであり、トム・ダーヴィス『詩神は渇く――アルコールとアメリカ文学』（*The Thirsty Muse*, 原書は 1989、トパーズプレス、1994）などが示すように、アメリカ作家たちとアルコールとの関わりは深いものであるが、文学や作家の枠組みを越えて、「酒といえばヘミングウェイ」のイメージが真っ先に浮かぶのがさすがである。

また、名古屋市千種区（今池駅から徒歩 3 分）にある「保護猫カフェ　ヘミングウェイ」は、

その名の通り NPO 法人ファミーユで保護された猫たちと触れ合うことができる猫カフェであり、猫たちが随時それぞれの里親を募集している。「猫といえばヘミングウェイ」のイメージも健在であり、猫愛好家の集う理想的な空間への願いが込められているのだろう。

実際に訪問してみたところ、人懐っこい猫たちとゆったりした時間を過ごすことができる。オリジナル T シャツなどのグッズも販売している。一時的に保護されながらも新しい家族を求める猫のシェルターとして、こうした保護猫カフェの役割は大きなものがあるのだろう。ヘミングウェイのイメージは猫愛好家の理念を象徴する記号として現在も流通している。

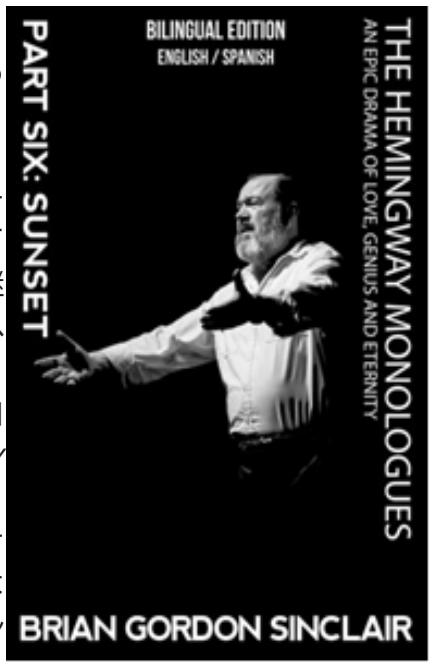
## ヘミングウェイを「演じる」

作家の「物真似役者」（impersonator）による独特のパフォーマンスが存在する。たとえば、マーク・トウェインであればハル・ホルブルック（Hal Holbrook, 1925-2021）による「マーク・トウェイン・トゥナイト」（*Mark Twain Tonight*）は一人芝居であり、晩年のトウェインに扮したモノローグによって展開される。トウェインを演じる以前から役者としての充分な実績を有していたホルブルックであったが、アイコン的な存在としてのアメリカ作家を演じてみたいという真摯な思いがマーク・トウェインを題材にした一人芝居に行きついた。

一人芝居（ワンマンショー）のロングラン（1969 -2017）記録を打ち立てたホルブルックがもっとも有名であり、パフォーマンス文化史の中でも格別に高い評価を得ているが、ローカルなイベント向けの有名人そっくりさん出張派遣サービスの存在などもあり、さまざまなイベントにマーク・トウェイン役者を呼ぶこともできるなど、その裾野は広い。日本でもタレント、有名人の特徴を大げさに誇張する物真似芸人の存在はよく知られるところで

あろう。アメリカの「物真似役者」も同様に、セレブリティを揶揄する向きが多いが、著名作家の「物真似役者」の場合、研究者さながらに専門家としての深い知識と愛情を兼ね備えている。マーク・トウェインであれば、どのように、何を発するかの探求の成果こそが長年にわたる一人舞台に裏打ちされている。ハル・ホルブルックは役者としてはもちろん、マーク・トウェイン研究の領域でも格別の敬意を払われている。高齢により 2017 年に引退を宣言するまで、生涯現役でステージに立ち続けた。

ヘミングウェイの物真似役者としては、ブライアン・ゴードン・シンクレア（Brian Gordon Sinclair）の存在を挙げることができる。「ヘミングウェイ・オン・ステージ」、そして 2001 年から継続している「ヘミングウェイ・モノローグス」（*Hemingway Monologues*）の一人芝居がその代表作となる。ハル・ホルブルックによる「マーク・トウェイン・トゥナイト」の流れを継承し、ヘミングウェイに扮したシンクレアのモノローグ形式による一人芝居である。マイケル・レイノルズによる評伝にも通暁し、メディアを通して作り上げられたヘミングウェイのイメージを超えて人間味を示そうとしている点に特色がある。



物真似役者のパフォーマンスではないが、ヘミングウェイの人物像に焦点を当てたテレビドラマ『ヘミングウェイ』（全 4 話、1988）はカーロス・ベイカーの評伝（*Hemingway: a Life Story*）に依拠している。ヘミングウェイを演じたステイシー・キーチはそれ以前にテレビドラマ版『探偵マイク・ハマー』（1984-87）にて主役を演じている。このテレビドラマ版『ヘミングウェイ』では、実像に迫るというよりむしろ、フィッシングやハンティングを旺盛に楽しむヘミングウェイのメディア・イメージを忠実に再現している。果敢に冒険に挑み、趣味の世界を追究し、人生を謳歌する、いわば一般に皆が期待するヘミングウェイ・イメージのエッセンスがここに凝縮されている。

アメリカにおける「ヘミングウェイ」のパブリック・イメージの浸透において、テレビドラマ作品は見過ごせない影響力を持つものであるのだが、概してテレビドラマ作品は他の文化圏からアクセスしにくいものでもある。その中で本作テレビドラマ版『ヘミングウェイ』は米国版 DVD で入手可能である（ヘミングウェイ最初の妻ハドリー役をジョセフィン・チャップリン［チャーリー・チャップリンの四女］が演じている）。

パブリック・イメージとそこからの脱却は物真似役者にとっての大いなる課題であり、ハル・ホルブルックからブライアン・ゴードン・シンクレアに至るまで、マーク・トウェイン、ヘミングウェイの実像を再創造することに腐心しながら発展を遂げている。そして役者自身が年齢を重ねていく中で、演じる対象である作家の人生の年輪もより一層深く実感されるものであるのだろう。

# 倉林先生の文学文法講座―第６回―

倉 林 秀 男

## ヘミングウェイの文法　繰り返しの文法

今回は、繰り返しの表現についてみていこうと思います。英語では同じ表現が何度も繰り返されることを好まないので、別の表現で言い換えるということを作文の授業に習った方は多いのではないでしょうか。確かに、論理的な文章を書いているときに同じ表現が連続して出てくると、よい文章ではないと思ってしまうことがあります。

繰り返しの表現が避けられる一般的な傾向に抗い、あえて同じ表現を繰り返し使うことで様々な効果があると考えられています。たとえば、キング牧師の有名なスピーチでは I have a dream が何度も繰り返されます。これを首句反復と呼ぶのですが、スピーチの主題を明確に聴衆に伝えるために重要な役割を担っています。ざっくりと文体論の立場から反復について「何らかの表現効果を狙うために反復表現が用いられる」と言うことができるでしょう。さて、今回も『老人と海』の場面を引用します。老人は左手の痙攣に悩まされながらも、マグロを食べ大魚と力比べをして緊張状態が続いています。そこに突然、右手にロープの変化を感じたところに続く場面からの引用です。

The line rose slowly and steadily and then the surface of the ocean bulged ahead of the boat and the fish came out. He came out unendingly and water poured from his sides. He was bright in the sun and his head and back were dark purple and in the sun the stripes on his sides showed wide and a light lavender.

まずは the fish came out と He came out では came out が繰り返されています。
「ロープがゆっくり、そして着実に上がってきた。そして、舟の前方の海面が揺らめいた。そして、あの魚が姿を見せた。その魚が姿を見せた･･･」という意味になっています。この時の解釈は「果てしない」「終わりのない」という意味の副詞である unendingly が重要な役割を担います。つまり、the fish came out で文が終わってしまうと、この段階で「魚が水面から出た」という意味となり、一瞬で出てきたような感じがします。しかし、老人の目の前に現れたのは大きな魚であり、unendingly と比喩的に現していることからも、その全ての姿を現すには時間がかっていることが読み取れます。この衝撃的な時間をダイナミックに描き出しているのです。魚の姿を雄大に捉え、堂々たる死闘の幕開けの描写といえるでしょう。日光に照らされた体の描写部分でもこの大魚の堂々とした姿を表現しています。それが in the sun の繰り返しです。「太陽の光で」輝いていると全体を俯瞰的に捉え、そして、頭と背が暗い紫色で、縦縞の部分が「太陽の光で」明るい紫色に見えるという描写は、そのスケールの大きさを表していると考えてもよいでしょう。

最後にこの引用部分は等位接続詞の and が何度も出てきます。文を単文で区切ることなく、等位接続詞でつなぐことで文が「一つの大きなかたまり」となり、それがあたかも大きな魚を暗示しているかのようでもあります。

# 追悼特集：ストーンバック先生

コロナ禍で世界が大きく変わる中、世界のヘミングウェイ研究も大きく変化しています。近年、これまで国際学会等でお世話になった The Hemingway Society の先生方が、立て続けにお亡くなりになっています。そこで、先輩方の偉業とやさしさに敬意と感謝の気持ちを込めて追悼特集記事を掲載することにしました。第 1 回目は The Hemingway Society 前会長のストーンバック先生との思い出を滋賀大学の真鍋先生にご寄稿いただきました。

International Hemingway Society の立ち上げに関わった一人で、2014 年から 17 年までその会長を務めた State University of New York, New Paltz 名誉教授の H. R. Stoneback が、2021 年クリスマス直前に亡くなった。80 歳だった。2014 年ヴェニス、2016 年オーク・パークでの大会を会長として成功に導き、さらに、特別の思い入れのあるパリでの大会を 2018 年見事に運営した姿が目に焼き付いてられる方も多いだろう。どっしり車椅子に座る周りを教え子たちが囲む姿は若干の威圧感を漂わせていたが、彼らに車椅子を押してもらって会場を動き回り、多くの人々ににこやかに声をかけていた。直接交流した人々の心に彼の優しさ、温かさが沁みた思う。日本ヘミングウェイ協会の多くの方は、大きな体躯を車椅子におさめ、カールした鬣のような白髪とモコモコした白い口髭と顎髭に覆われた顔に微笑を浮かべて、深く低い声でゆっくりと、詩的かつ論理的な論文発表や講演をする、あるいは、自作の詩を歌うように読む、老いても力強い研究者・詩人のイメージをお持ちではないだろうか。私が Stoney に初めて会ったのは、1991 年秋ペトスキーでの学会だった。当時彼は 50 歳で、パイプ片手に貫禄はあったものの、彼と親しく行動していたヘミングウェイ研究者たちが、かなり年上だったこともあり、とても背の高い優しいお兄ちゃんのように見えていた。そして先に旅立ってしまった奥様の通称 Sparrow(Stoney が Harry Robert と呼ばれるのを聞いたことがないのと同様に、彼女の Jane Arden も一度も聞いたことがない）が、いつもそばにいて、明るくしっかり、意見をはっきり強く述べ、姉のような感じであった。Stoney がそばで微笑みながら彼女を寡黙に見つめる、そういう姿が学会会場でも見受けられた。ここでは、1990 年代前半から半ば、主にアメリカ、時にヨーロッパで、豊かな時と空間を共有させてくれた Stoney、また、ヘミングウェイに魅せられて、彼とともに Nick Adams Society を作り、熱い時を過ごした研究者たちについての個人的な思い出の一端を紹介する。個々異なる強烈な個性を持つ人たちが、ヘミングウェイ協会以外でもビミニ、キューバなどに赴き、文学・人生を熱く熱く楽しんでいた。2022 年には Stoney に先立ちアマースト大学の Don Junkins、MIT の Will Watson、そして 2023 年 1 月にデラウェア大学の Rick Davison と 1 年足らずで 4 人も向こうの世界にいってしまった。ノース・ダコダ大学の Bob Lewis、そしてカリフォルニア州立大学サンフランシスコ校の Robin Gajdusek も既に失く、サウス・フロリダ大学の Allen Josephs だけが残っている。南北戦争期の将軍のような風貌の落ち着いた紳士 Bob、知的な笑いに満ちた英国紳士のような Will、くるくるした愛嬌ある目の柔らかい Rick の穏やかな 3 人、そして逆に激しい火を散らす激論を大声で交わす Don、Allen そして Robin。その中でひとり、いつもそこにいるけれど、一歩引き存在感を押し出さず、落ち着いて全体を見ながら、穏やかに熱い意見を述べる、また、さまざまな「面白いこと」を企画し、その中心になって皆を楽しませる、それが私の知る Stoney である。

Stoney の驚くべき知識に基づいた、緻密な読みが展開する、*The Sun Also Rises* を扱った、ケント大学出版局の Reading Hemingway シリーズ第 1 巻 (2014) から我々が得る恩恵は限りないことを、誰しも実感しているだろう。幼い頃から想像力を発揮しながら、文学（創作）と音楽を creative に楽しむ家庭環境に育った Stoney は、New Criticism 隆盛期のヴァンダービルド大学で学ぶことを選び、晩年まで Robert Pen Warren を mentor と呼んでいた。ヴァンダービルドでのテクスト細部にこだわる精読に加え、Distinguished Professor に選ばれるほど教育に

熱心であったことが、時を重ねて *SAR* の見事な手引き書に至ったと思われる。そして、その読みの個性にカトリック理解が展開する。Stoney の研究を高く評価する Robin が、特にその宗教性、特にカトリック面を炙り出す点に感服していたのは尤もである。この点が、Stoney が愛した街パリを扱った *Hemingway's Paris: Our Paris?*(2010) に、ヘミングウェイのパリを扱った他の書物にはない次元を加えている。さて、Stoney の思い出の重要な部分に、彼が招いてくれた自分の住居でのパーティ（ニューヨーク州の自宅であれ、旅行中に滞在した場所であれ）がある。そのパリで 1994 年に開かれたヘミングウェイ・フィッツジェラルド合同大会の時に、イル・サン・ルイのアパートで Stoney と Sparrow が開いたパーティに招待された誰もがふたりの hospitality のおかげで幸せに満たされた。このパーティが彼にとっても大きなものだったことが、2016 年オーク・パークでの大会前夜のレセプションで、日本の協会のみなさんと撮った写真を、送ったことへの返事に現れている。

私信ではあるが、彼の人柄、また日本ヘミングウェイ協会への強いメッセージを含むので、そのまま掲載する。

Ma chere Akiko--

Thank you for the lovely pictures (lovely, not of me but all others). It was so very good to meet all the Hemingway Society of Japan members in Oak Park. And to think of them reading our words of greeting in your newsletter and planning to come to Paris in 2018.

And ah yes--the last time I saw you in Paris. I remember very vividly the big party we gave at my apartment on the Ile St.-Louis--your presence, Robin's presence, and all the others (so many gone now)..Somewhere there exists a videotape of that party (taken by Don J). We were all so young then . . . But then some of us are still young (aren't we) and Paris 2018 is just around the corner and life must be lived with joie de vivre!.

See you soon in Paris (if not sooner)---
With warm thoughts and wishes---Stoney

P.S Remember that we very much hope you will organize a panel for Paris 2018; and encourage

all your colleagues and students and Society members to submit papers and come to Paris--We'll take an even larger group picture at the Eiffel Tower or some such enchanted place in the City of Light.

この時点で既にいなくなっていた人々への追憶、時の変化、でもぼくたちはまだ若いと、生を楽しもうとのメールを引用すると、ここで終えるべきとの気分だが、もう少し進めさせていただく。Stoney と Sparrow が Highland, NY の自宅で 1997 年に開いた Nick Adams の集い～自宅の庭での paper reading、屋根裏と近くを流れるハドソン川の船上での poetry reading そして自宅 dining room での banquet ～は知の共演、真のシュンポシオンで圧巻だった。上記のメンバーは皆そこにいた。お恥ずかしいが、写真を掲載するので、感じていただければと思う。

Sparrow がそばにいない Stoney、そして誰よりも背が高かった Stoney が、車椅子に座って誰よりも背が低くなるなどと誰が想像できただろうか。しかし、彼はそれも生き抜き、彼を愛する教え子が車椅子を押した。2012 年ペトスキーでの学会で、彼は教え子たちと一軒家を借りた。私はそこでの poetry reading の夕べに招かれ、詩を、歌を、人を愛する彼の変わらぬ姿を目の当たりにした。その時、ギター片手に Stoney がゴスペル（と言っていいのかわからないのだが）を歌い始めると、Sparrow ならぬ Don がともに歌い始め、ふたりで延々とセッションを始めた。ふたりにとっては子どものころから教会で慣れ親しんだ歌が次々に奏でられ、キリスト教がこのように体の一部となっている人たちの読みにはそうではないものとは違う次元が見えてくるのだろうと思わされた。

そして最後に、ギター。Stoney のギターと深い声の歌声、Sparrow の高く澄み切った歌声は一度聴いたら魅了されない人はなかっただろう。このふたりは 1960 年代からアメリカ全土、そしてフランス、のちに中国で、フォーク、ゴスペル、トラッド、ジャズ…オリジナルからコピーまで、聴衆にあわせた演奏で人々の心を満たした。Sparrow/Stoney のデュオの音楽はそれを体験した我々の心の耳にいつも響きわたっている。ふたりの天と地の両方を満たす音楽に感謝して、稿を締めさせていただく。Thank you, Stoney and Sparrow.
( 本稿を書き始めて、Don の妻 Kaimei を懐かしくなり連絡したところ、Allen がこりずにまた結婚したってさっきメール来たよとのこと。Well, life goes on…)

真鍋晶子（滋賀大学教授 )

彼の家での集いの banquet です。

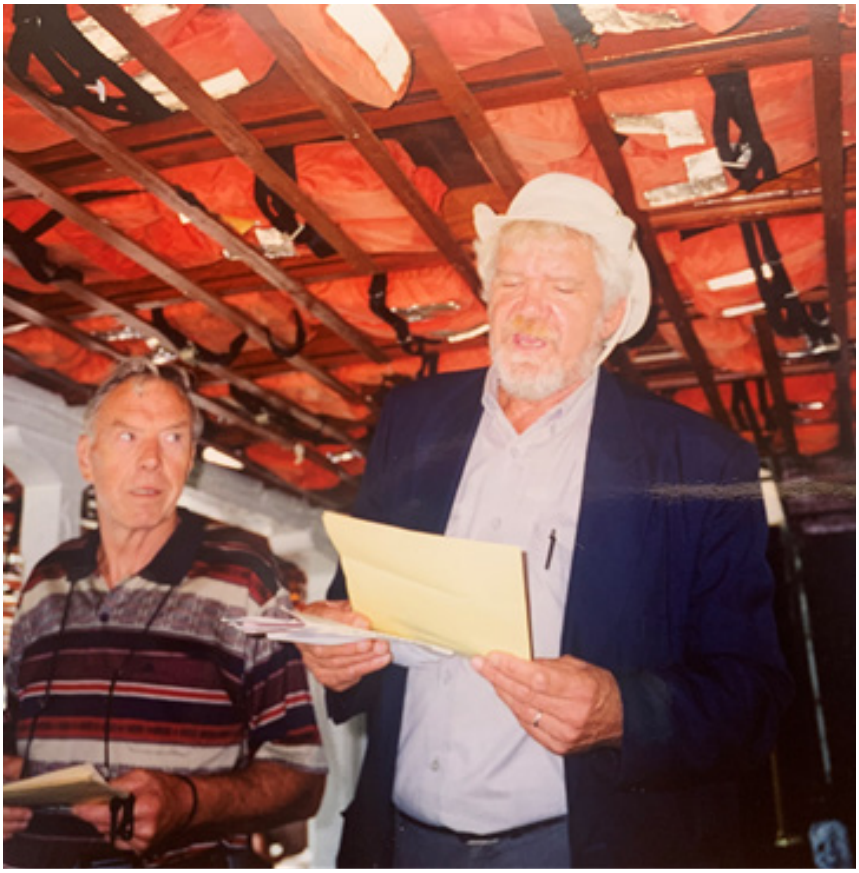
先と同じ banquet にて
ホストの Stoney, Allen Josephs, と私
後ろすがたは DonJunkins の妻 Kaimei, Will Watkins, Rick Donalson

Sparrow と食事を作ってくれた教え子たち。
後ろの壁に若き日の Sparrow の写真、その上に若き Stoney と Sparrow の演奏シーン

感動のあまり泣いてしまったわたしをかこむ Sparrow と Stoney

左の写真の直後

ハドソン川のボート上　portry reading. Don & Stoney



ハドソン川べりでのランチ。Sparrow, Stoney, Will.

NY の自宅庭で Paper Reading の講演台準備中

NY のお家の屋根裏で poetry reading

# 会員情報

▼会員のみなさまへ

お名前・ご連絡先・ご所属に誤りもしくはご変更がございましたら、大変お手数ですが速やかに事務局（担当：若松正晃）までお知らせくださいますようお願い申し上げます。事務局連絡先は下記のとおりです。

**〒 583-0868 大阪府羽曳野市学園前 3 丁目 2 － 1**
**四天王寺大学 人文社会学部 若松正晃研究室内**
**日本ヘミングウェイ協会事務局**
**e-mail: hemingwayjapan@yahoo.co.jp**

▼ e-mail address 登録のお願い

事務局では、迅速かつ正確に情報を伝達すべく、皆さまのメールアドレスを収集しております。未提出の方は＜ **hemingwayjapan@yahoo.co.jp** ＞までお知らせ下さい。

**＜新入会員＞**

池末 陽子　龍谷大学
岡田 虎之輔　龍谷大学（院）
Jorge García Arroyo　鹿児島県立短期大学

**＜退会＞**

入江 識元
上西 哲雄
牧田 昭彦

**＜所属変更＞**

中村 嘉雄　九州大学

（敬称略）

## 会費納入のお願い

2023 年度の年会費（会計年度 2023 年 4 月 1 日～ 2024 年 3 月 31 日）を、以下の区分にしたがって納入いただけますようお願い申し上げます。

・高等教育機関専任教員（嘱託含む）　5,000 円
・高等教育機関専任教員以外（非常勤講師、会社員、退職者含む）　3,000 円
・学生（学籍があり、授業料納入者）　2,000 円

後日、会費納入のお願いと振込用紙のみを郵送いたします。お手元に振込用紙が届きましたらお振込みをお願いいたします。

その際、過年度会費が未納の方へは、その旨のご説明も記載いたしますので、今年度の会費と共に未納分もあわせてご納入くださいますようお願い申し上げます。

■振込用紙がお手元に届く前にご納入いただく場合、あるいはインターネットバンキングをご利用の場合は、下記の口座情報をご参照ください。

（最寄りのゆうちょ銀行から）従来のお振込みのための情報

| | |
|---|---|
| **記号・番号** | **00150-2-655708** |
| **加入者名** | **日本ヘミングウェイ協会** |

インターネットバンキングのための情報

| | |
|---|---|
| **銀行名** | **ゆうちょ銀行** |
| **金融機関コード** | **９９００** |
| **店番** | **０１９** |
| **預金種目** | **当座** |
| **店名** | **〇一九 店（ゼロイチキユウ店）** |
| **口座番号** | **０６５５７０８** |

当協会は、会員の皆様からの会費を唯一の収入源として運営されております。ご理解とご協力をよろしくお願い申し上げます。

# 資料室報告

河 田 英 介

あっという間に冬が終わり、気がつけばゴールデンウィークまで残すところ半月となりました。皆様のヘミングウェイ・ライフはお進みいかがでしょうか。

皆様におかれましては、秋号でもご紹介しました、第 7 回日本アメリカ文学会賞を受賞された小笠原亜衣会長の単著『アヴァンギャルド・ヘミングウェイ : パリ前衛の刻印』（小鳥遊書房、2021）を手に取っていただけましたでしょうか。この著書は、ヘミングウェイのパリの前衛、スタイルの確立、移動性と詩学、アメリカ現代芸術との連動、眼差しの欲望、ヘミングウェイのアメリカ性等のテーマを取りあげ、その時代の多様特有のアートとヘミングウェイの時代ブロック毎の創作性との関係性を明らかする、一言で言えば「アートの中のヘミングウェイ」を紐解いてくれる本です是非とも手に取っていただければ幸いです。

さて、皆様は大学校務等でご多忙な毎日を過ごされていることと存じますが、最近は資料室への寄贈が徐々に減ってきておりますので、何卒、関連する研究著書・論文等を資料室にお送りください。お待ちしております。

これまで協会資料室は（2023 年 3 月 31 日まで）中村亨研究室（中央大学）を協会資料室としてさせていただきました。短い間でしたが、中村亨さんには本当にお世話になりました。つきまして新たにご報告申し上げます。2023 年 4 月 1 日から協会資料室は、運営委員でもある中央大学の中野学而さんの研究室に引っ越しをしました。今後の協会への資料の寄贈は、どうか次の宛先にお送りください。

「〒 192 － 0393　東京都八王子市東中野 742 － 1　中央大学文学部　中野学而研究室気付日本ヘミングウェイ協会資料室　河田英介」

資料をお送りいただく際は、必ず河田英介（ekawada377@g.chuo-u.ac.jp）までご一報ください。奮ってご著書・論文その他をお送り下さい。どうぞ宜しくお願いいたします。

# 学術誌『ヘミングウェイ研究』に関するお知らせ

『ヘミングウェイ研究』第 25 号への投稿のお願い

現在、『ヘミングウェイ研究』第 24 号を 6 月に発行するために、鋭意作業をしております。

『ヘミングウェイ研究』第 25 号（2024 年 6 月発行予定）への投稿論文を募集しております。論文の投稿方法が変更になりました。協会公式サイトから論文投稿フォームを利用してお送りいただくため、ハードコピーの提出が不要となりました。詳しくは協会公式サイトをご確認ください。

今年 6 月刊行予定の第 24 号巻末の投稿規定を参考にして、奮ってご投稿ください。締め切りも投稿規定の中に記されています。なお投稿に際して、Works Cited は最新の MLA 形式に従うようにしてください。

学術誌編集室長　倉林秀男

# 2023 年度　5 月ワークショップのお知らせ

## ワークショップ開催日時と場所

日時：2023 年 5 月 20 日（土）10 時開始＊
場所：関東学院大学　横浜・関内キャンパス　13 階 1305 教室
＊教室利用時間は 9：30 ～ 14：30

協会 HP にも掲載されますのでご確認ください
協会 HP：　**http://hemingwayjapan.org/annual-meeting/651.html**

## ワークショップ：“The Short Happy Life of Francis Macomber” を読む
## ー交錯する視線ー

司会・講師：戸田慧　（広島女学院大学）
講師：長尾晋宏（森ノ宮医療大学）
横山晃　（明治大学）
西光希翔（広島修道大学）

## WS 内容要旨

“The Short Happy Life of Francis Macomber” は 1936 年 9 月号に *Cosmopolitan* 誌に掲載された短編小説である。アフリカのサファリに参加したアメリカ人フランシス・マカンバーがライオン狩りに失敗した場面から物語が始まり、妻マーガレットとイギリス人の狩猟案内人ロバート・ウィルソンの不貞に対する怒りから臆病さを克服し、ついに水牛を仕留めようとしたとき、妻が放った銃弾によって命を落とすという場面で幕を閉じる。本作はヘミングウェイ作品の中でも一般的な人気が高い作品であり、特に結末のマカンバーの死が妻マーガレットによる故意の殺人なのか、それとも水牛に襲われそうになった夫を救おうとしたための不幸な事故なのかは批評家の注目を集め、長年にわたり議論の的であった。しかし、逆を言えば、結末の解釈に読者や批評家の注目が集中する傾向にあったともいえる。

本作はヘミングウェイが良質な小説を書くことに苦戦したといわれる 1930 年代のスランプの時期の作品だが、猛獣狩り、死の恐怖との対峙、「男らしさ」と「女らしさ」の問題、視点の転換といった、ヘミングウェイ作品における重要なテーマをいくつも含んでおり、さらに多様な解釈の余地があると考える。そこで本ワークショップでは戸田慧がこれまでの批評の流れを概観した上で、登場人物たちの行動規範となる「男らしさ / 女らしさ」というジェンダーの問題について、横山晃が作品タイトルにも含まれている「幸福」の意味についてアメリカの歴史的文脈から問い直す。長尾晋宏は狩りの場面における「繰り返しの構造」に着目し、西光希翔は「写真」と狩猟の関係性から考察を行う。結末の解釈が今もなお重要であることに変わりはないが、多様な視点から読み直すことで、本作のさらなる魅力を発見したい。

# 大会・ワークショップに関するお知らせ

## 研究発表募集

全国大会の研究発表を募集しています。エントリーは年間を通して**8月末**まで随時受けつけており、「発表要旨」を添えての応募締切は**9月下旬**となります。

ヘミングウェイ研究全般はもちろん、ヘミングウェイと他の作家を横断する研究、ヘミングウェイと教育の連関など幅広く歓迎します。研究歴を問わず多くの方々の積極的なご応募をお待ちしています。（研究発表には審査がありますことご承知おきください。）大学院生の発表に対しては、協会から研究奨励金（2万円）が支給されます！

## ワーク・イン・プログレス発表募集

全国大会のワーク・イン・プログレスにおける発表を募集しています。エントリーは年間を通して7月末まで随時受けつけており、「発表要旨」を添えての応募締切は8月下旬となります。

未完の研究、中途の研究、未解決の問題などなど、完成された研究である必要はありません。未完成のまま提示して，みなで問題を共有し議論し、あるいはアドヴァイスをおくり、その研究を実りあるものにするのが目的です。

ワーク・イン・プログレスについては、ご応募いただいた方になるべく発表していただくことを原則としています。ただし、「研究」としての完成をめざすものであることは求められますので、審査委員会を経ていただくこととなります。「研究」としての手順や体裁等を踏まえていただければ幸いです。

なお、ワーク・イン・プログレスも大学院生への研究奨励金の対象となります！

## エントリー / 応募 / 照会

**◇◇◇各種エントリー・応募先◇◇◇**

下記のいずれかにて、エントリー・応募を受け付けております。

大会運営委員全国大会担当 : 古谷裕美　　furutani@kanto-gakuin.ac.jp
ワーク・イン・プログレス担当：陸君　　junlu@po.kbu.ac.jp

**◇◇◇その他、大会運営に関するご照会◇◇◇**

大会運営委員長：塚田幸光　　hiro2827@gmail.com

**◇◇◇最新情報は・・・◇◇◇**

日本ヘミングウェイ協会の最新情報は、**The Hemingway Society of Japan Blog** に掲載されています。ぜひご覧になってください。

URL → **http://hemingwayjapan.blogspot.com/**

また、急なお知らせなどはメールにてお送りすることもあります。協会にアドレスを登録されていない方は、事務局までメール（hemingwayjapan@yahoo.co.jp）にてご一報ください。

## 編集後記

日本ヘミングウェイ協会の会員の皆様いかがお過ごしでしょうか。朝方はまだ冷えますが昼間はいよいよ陽気でにぎやかになってきました。

歴史に「もし」や「巻き戻し」ボタンがないことはわかりますが、ことさらコロナ禍ほどそれを実感させるものはなかったと思います。現代建築が以前の絢爛な装飾的意匠からすっきりしたモダン様式へ変わったのも細菌の発見によるところが大きいとのこと。やはり直に「身体」に影響する問題は歴史を大きく変えていきます。そして、ヘミングウェイ研究も大きく変わってきています。今回の追悼特集の、アメリカのヘミングウェイ協会の元会長ストーンバック先生に続き、昨年はピーター・L・ヘイズ先生もお亡くなりになりました。

今年は春らしい兆しが見えてくるといいな、と心底思います。食べることの大好きな息子も今年農学部（やっぱり食品関係）に入学しました。昨日までティッシュを「ふん、ふん」言って全部引っこ抜いていたのに。今回は、「我が家の春の一品」というタイトルで編集委員の方に一言お寄せいただきました。今しばらく、お付き合いください。

（ニューズレターも次号から新しい編集長へとバトンタッチです。引き続き皆さんのご愛読をお願いいたします。これまで拙い編集で関係者や読者の皆さんにご迷惑をおかけしました。ご協力ありがとうございました。私とも「もうしばらく、お付き合いください」）

我が家のひな祭りは必ずパパ（パパの方が料理上手）がちらし寿司を作ります。サーモンとマグロに、桃色のでんぶ（よく巻き寿司にちょろっと入っている甘いやつ）をチラシて春らしい感じに仕上げます。

（中村嘉雄）

我が家の春の一品はたけのこです。たけのこご飯はもちろん、土佐煮等の煮物も最高です。ただし、あまり食べすぎるとお腹がおかしくなるので食べ過ぎには注意が必要です。

（長尾晋宏）

我が家の春の一品は、桜餅。桜の花びらを練り込んだもちもちした餅と、あんこを合わせた和菓子で、春の訪れを感じさせる香りが魅力。お茶と一緒に味わうと、ほんのり甘くて、心がほっこりします。

（ChatGPT）

我が家の春の一皿といえば、アスパラガスを使った料理です。毎年５月になるとアスパラガスが畑の一角に続々と生えてきます。それらを収穫し、サラダやベーコン巻きにして、桜の花と鯉のぼりを眺めながら、味わい楽しむことが恒例行事のようになっています。

（本荘忠大）

**日本ヘミングウェイ協会**

**NEWSLETTER 84 号**

2023 年4月20 日発行

編集責任・発行人　中村嘉雄

発行所　〒 819-0395

福岡市西区元岡 744　九州大学

伊都地区センターゾーン　センター3号館

中村嘉雄研究室

nakamura@artsci.kyushu-u.ac.jp

事務局　〒 583-8501

大阪府羽曳野市学園前3丁目 2-1

四天王寺大学　人文社会学部

若松正晃研究室内

日本ヘミングウェイ協会事務局本部

hemingwayjapan@yahoo.co.jp